

## 親の意識は子どもの健康体力関連行動意識にどう関与するか

波多野 義郎 \*山田 俊大 \*\*久下 浩史 \*\*藤川 秋子

The relationship between the health-related lifestyle, behavior and consciousness  
of the child and that of the parents

Yoshiro Hatano, \*Toshihiro Yamada, \*\*Hiroshi Kuge, \*\*Akiko Fujikawa

### Abstract

In an attempt to find out the relationship between the health-related lifestyle, behavior and awareness of the child and that of the parents, a questionnaire survey was conducted to a group of parents whose children attend Nichinan Public Schools, Nichinan City, Miyazaki Prefecture. The questionnaire contents were developed upon a literature survey regarding to the health-related lifestyle, behavior and consciousness of the children.

The results indicated statistically significant relationships about the health-related lifestyle, behavior and awareness between ① the current status (elementary school age level) total score of the children and that of when they were pre-school age, ② the current status of the elementary school children and that of their parents, ③ the pre-school age level and the parents total score and ④ the current status (secondary school age level) total score of the children and the parents. On the other hand no statistically significant relationships about the health-related lifestyle, behavior and awareness were found between the current status (secondary school age) total score and the parents.

The total health-related lifestyle, behavior and awareness score of the child (the parents selected one child to make responses in this study), calculated upon examining the responses made by the parents, the children were divided into three groups, i.e., high, medium and low total score groups. Regarding the high total score group, statistically significant relationships were found between the following combinations: ① parents attempting to walk intentionally and children happily and vividly running around lifestyle, ② parents feeling that they have strong kinship with the family members and children having opportunities to play sport with parents, ③ parents feeling that they fall asleep easily and children not eating foods in off-hours, ④ parents liking sport and playing and the children feeling that life is precious, and ⑤ parents feeling that they have strong kinship with children and children having played with parents during pre-school period.

Key words :

キーワード：親の健康意識 子の健康体力関連意識 子の生きる力

2006. 1.18 受理

---

九州保健福祉大学社会福祉学部スポーツ健康福祉学科 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町 1714 - 1  
Department of Sport, Health and Welfare, School of Social Welfare, Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka,  
Miyazaki, 882-8508 JAPAN

\*九州保健福祉大学大学院社会福祉学研究科 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町 1714 - 1  
Graduate School of Social Welfare, Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki, 882-8508 JAPAN

\*\*九州保健福祉大学大学院(通信制)社会福祉学研究科 〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町 1714 - 1  
Graduate School of Social Welfare (correspondence), Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki,  
882-8508 JAPAN

## 1. 緒言・方法

### 1. 1. はじめに

子どもの体力が低下していると言われている。この事柄に対して最も信頼できる資料は文部科学省文部科学省スポーツ・青少年局が毎年刊行している「体力・運動能力調査報告書」を措いて他にはないであろう。ちなみにこの報告の初年度集計は明治33(1900)年に行われたが、この種の統計としては世界に類のない歴史を誇っている。

さて近年の子どもの体力低下であるが、測定項目にもよるが概ね昭和60(1985)年頃から成績の漸減傾向が見られる<sup>1)</sup>。文部科学省の公式刊行物であるためか、漸減傾向についての意味づけや、社会学的考察等は含まれていないので、このような事柄についてはむしろ民間にある各大学・研究機関等において、自由な議論が必要と思われる。

体力低下が最初に注目されたのは小学校男女児童の走り幅跳び種目におけるその現象であった<sup>2)</sup>。そしてこの傾向は漸次ハンドボール投、50m走等へと波及して行き、やがては体力・運動能力合計点の下降現象へとつながって行った<sup>3)</sup>。

体力低下現象は単なる体力の問題ではなく、運動部・スポーツクラブへの所属状況、運動・スポーツの実施状況とも深く絡んでいるため、所属・実施状況に陰りが出れば、全体平均点が低下する。更に近年では、所属・非所属の2群による、体力テスト成績の双極化現象が指摘されるに至っている<sup>2)</sup>。また朝食摂取状況との関連も指摘され<sup>2)</sup>、更に友人との交友関係の多寡、寝つきの良否、幼少児期における遊び・スポーツとの関与<sup>4)</sup>、親との遊びの状況などが小学校期児童の体力に関与しているとの報告もある<sup>5, 8)</sup>。このような体力上の優劣は健康生活を脅かし、ひいては健康そのものへも悪影響を及ぼすことが指摘されている<sup>6, 7)</sup>。そう考えると、子どもの体力低下が危惧される時代であるが、それは健康体力を総合して考えるべきであり、またその背景にある親との関わり合いの生育歴との関係から議論する必要があることは言うまでもない。これらが全て順調に絡み合っ、子が精神的にも明るく朗らかな状態を保ちつつ体力と元気に満ち溢れて望ましい生活が送れる事を目指すからである。

### 1. 2. 目的・方法

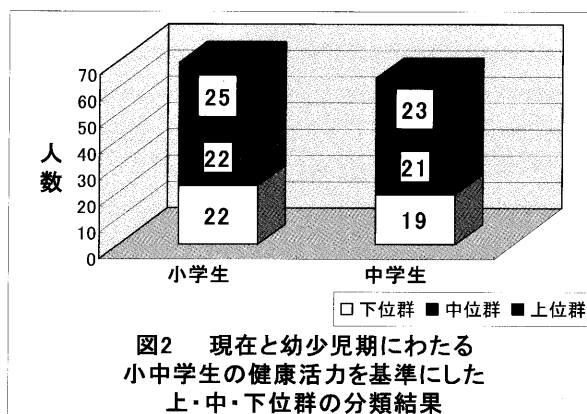
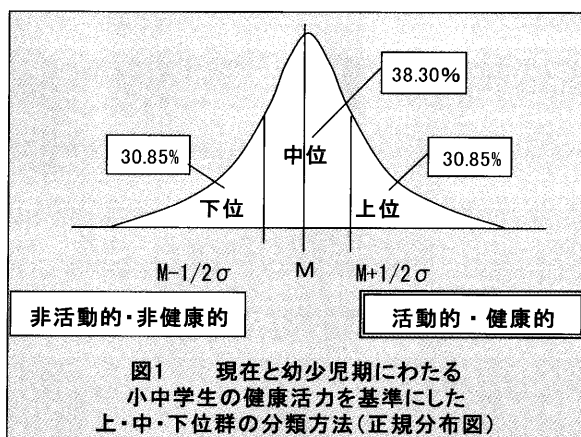
本研究では現代の子ども(小中学生)の健康体力に関連する日常生活における意識や習慣・行動が多少なりとも健康的に展開されるための条件を、特に親との関わり

合いの中で検討してみたいとの関心から、一連の調査研究を進めようとするものである。このプロジェクトでは教育に前向きな姿勢を持つ、児童生徒の保護者を対象に質問紙調査を行い、それにより親の意識は子どもの健康体力関連行動意識にどう関与するかを検討することを具体的な方法とする。

質問紙の質問内容については、親の係わり合いが子どもの健康体力面の意識や行動にどのような関与をするかと言う観点から、先行研究<sup>4, 5, 6, 7, 8)</sup>に基づいてその項目を取捨選択した。具体的にはこの意識・行動に関する26項目(A. 子の健康体力)、この幼児時代の意識・行動(B. 幼児時代の健康体力)に関する12項目、親自身の意識・行動(C. 親の健康体力)に関する9項目、合計47項目から成り立っている。調査の結果はA, B, C各領域についての合計点の大小から領域相互の関与度を検討する一方、各項目別の分析も行い、健康体力に関する各項目の特異的相関度を検討した。

実際の調査は、2005年2月13日宮崎県日南市PTA連合会が開催した教育行事の際に、会場に集まった保護者に質問紙を直接配布し、回答に同意した者から回収した後に項目分析を行ったものである。一人の親に複数の子がいる場合には、その一人を選びその子について記入するという方法にした。回答者は合計132名であったが、親との関与について記入するように選択した子は小学生69名、中学生63名であった。

先ず記入の対象となった子(児童生徒)に関して現在と幼少児期における意識・行動について親から評価記入した成績の合計点により、上位(望ましい活動的・健康的体力行動傾向)群、中位(平均群)、下位(望ましくない非活動的・健康的体力行動傾向)群の3群にグループ分けを行った。分割する際には、合計点の度数分布の中から $M \pm 1/2 \sigma$ を境界として用いた(図2)。これにより3群間の人数は理論上は各30%台の配分になると予想されるが、実際は図1のようになり、およそ妥当な分割であったと思われる。



### 3. 結果

#### 3.1. 親の意識と子どもの意識・行動（各合計点）の関係について

親の意識とその子どもの健康関連行動意識を問う質問調査の質問項目 A（子の健康体力）、B（幼児時代の健康体力）、C（親の健康体力）それぞれの合計点を掛け合わせた相関係数を求め、一覧表にしたのが表1である。

その結果次の事が示されたといえる。①小学生の健康関連行動意識について、その現在と幼少児期との間の相関は高い（ $p < 0.0001$ ）。②小学生の現在における健康関連行動意識と親の意識との間の相関は（ $p = 0.0004$ ）高い。③小学生の幼少児期における健康関連行動意識と親の意識との間の相関は高い（ $p < 0.0001$ ）。④中学生の健康関連行動意識について、その現在と幼少児期の相関は高い（ $p < 0.0001$ ）。⑤中学生の現在における健康関連行動意識と親の意識との間の相関は高くない（ $p = 0.127$ ）。⑥中学生の幼少児期における健康関連行動意識と親の意識との間の相関は高くない（ $p = 0.127$ ）。

以上の結果から次のような意見を得る。子どもが幼少児期及び小学校期にある時は、子の健康体力関連意識行動は大きく親の意思・行動に左右される。つまり子が小

さい時は親の健康体力関連の意識・行動が直接的に子どもに反映されるので、親がその影響力を意識して、努めて高い健康体力関連の意識や行動を維持することが望ましいといえることができる。しかもこの影響は幼少児期から生起しているため、子の成長段階の早い時期からこの影響状況について留意する必要がある。言い換えると幼少児期に既に子が活発になり健康的意識を持つに至っていれば、その影響だけによってその後の成長段階の健康体力関連意識行動が確保されていると考えられる。

次に子が中学生期に成長した段階では、親の意識が活動的・健康的であっても子への意識上の影響力はさほどではないこと、幼少児期及び小学校期の意識・行動は中学校期の子にそれほど有効に引き継がれないことが示唆された。言い換えると中学校期の生徒は単に親の影響だけに限らずに、教師、友人、施設環境、所属団体の社会的影響力など、自分を取り巻く多くの社会的影響力（important others）の支配を受け、従って家族から漸次独立を果たし、自己の固有の意識・行動を確立していく段階に入る訳である。このような現象は既に他の研究においても指摘されているところである<sup>9)</sup>。

#### 3.2. 小学生上位群における個別項目の関係について

次に健康体力に関する親の意識と小学校期児童の現在及び幼少児期における健康体力関連行動意識との関連を、小学生の現在の合計点（領域A）が高い者（上位群）について検討し、表2に書き出した。先ず親の意識として「スポーツが好きだ」と答えた場合と、小学生現在の健康関連行動意識「父母とスポーツをすることがある」との間には極めて高い相関度が示された（ $r = 0.700^{**}$ ）。また親の意識「疲れにくい」と小学校児童現在の健康関連行動意識「自分から考えて新しいことを試すタイプである」の間にも同様に極めて高い相関度が認められた（ $r = 0.669^{**}$ ）。

親の意識「努めて歩くようにしている」と小学生現在の健康関連行動意識「小学校児童期において生命を大切に、可愛そうという気持ちがわかる」との間の相関も高かった（ $r = 0.552^{**}$ ）。親の意識「家族の絆が強い方だと思う」と小学生現在の健康関連行動意識「小学生現在について父母とスポーツをすることがある」の間の相関は高い（ $r = 0.516^{**}$ ）。親の意識「家族の絆が強い方だと思う」と小学生現在の健康関連行動意識「幼少児期について親子でよく遊んだ方だと思う」との間の相関も高かった（ $r = 0.516^{**}$ ）。親の意識「努めて歩くようにしている」と小学生現在の健康関連行動意識「生き生きとして跳び回るタイプである」との間にも有意な

相関が認められた ( $r = 0.508^{**}$ ). 親の意識「スポーツや遊びが好きだ」と小学生現在の健康関連行動意識「親が教えたりしかったりしても素直に受け入れる」との間にも有意相関が見られた ( $r = 0.507^{**}$ ).

親の意識「家族の絆が強い方だと思う」と小学生現在の健康関連行動意識「小学生期について朝の目覚めは良い」との間にも多少の有意相関が認められた ( $r = 0.476^*$ ). 親の意識「努めて歩くようにしている」と小学生現在の健康関連行動意識「小学生期についてスポーツや遊びの運動神経が良い方だ」との間にも有意相関が示された ( $r = 0.438^*$ ). 親の意識「努めて歩くようにしている」と小学生現在の健康関連行動意識「小学生期についてテレビやビデオを見たりテレビゲームをするのが好きではない」との間にも有意な相関が示唆された ( $r = 0.426^*$ ). 親の意識「家族の絆が強い方だと思う」と小学生現在の健康関連行動意識「小学生期においてスポーツや遊びの運動神経が良いほうだ」との間にも有意相関が見られた ( $r = 0.408^*$ ). 親の意識「家族の絆が強い方だと思う」と小学生現在の健康関連行動意識「小学生期において炭酸飲料を良く飲まない」との間にも有意な相関が見られた ( $r = 0.408^*$ ). 親の意識「子どもの前で夫婦喧嘩しない」と小学生現在の健康関連行動意識「小学生期について朝の目覚めは良い」との間にも有意性が見られた ( $r = 0.406^*$ ).

以上の相関関係について論理的な説明が可能な組み合わせ

表1 親の健康意識と子どもの健康関連行動意識 (各合計点との相関行列)

	小学生質問			中学生質問		
	小学生の現在 A	小学生の幼少児期 B	小学生の親 C	中学生の現在 A	中学生の幼少児期 B	中学生の親 C
小学生質問	A 0.602	B 0.43	C 0.48			
中学生質問	A -0.052	B -0.01	C -0.243	A -0.149	B -0.074	C -0.081
				A -0.16	B 0.64	C -0.004
					A 0.127	B 0.127

表2 小学生上位群における親の意識と子どもの健康関連行動意識との相関関係 (有意差の組み合わせ)

親の健康意識	小学生の子どもについての健康関連行動意識	r
スポーツや遊びが好きだ	小学校期において父母をスポーツをすることがある	0.700 **
疲れにくい	小学校期において自分から考えて新しいことを試すタイプである	0.669 **
努めて歩くようにしている	小学校期において生命を大切にす、可愛そうという気持ちがわかる	0.552 **
家族の絆が強い方だと思う	小学校期において父母とスポーツをすることがある	0.516 **
家族の絆が強い方だと思う	幼少児期において親子でよく遊んだ方だと思う	0.516 **
努めて歩くようにしている	小学校期において生き生きとして跳び回るタイプである	0.508 **
スポーツや遊びが好きだ	小学校期において親が教えたりしかったりしても素直に受け入れる	0.507 **
家族の絆が強い方だと思う	小学校期において朝の目覚めは良い	0.476 *
努めて歩くようにしている	小学校期においてスポーツや遊びの運動神経が良い方だ	0.438 *
努めて歩くようにしている	小学校期においてテレビやビデオを見たりテレビゲームするが好きではない	0.426 *
家族の絆が強い方だと思う	小学校期においてスポーツや遊びの運動神経が良いほうだ	0.408 *
家族の絆が強い方だと思う	小学校期において炭酸飲料を良く飲まない	0.408 *
子どもの前で夫婦喧嘩しない	小学校期において朝の目覚めは良い	0.406 *

\*=0.05水準で有意  
\*\*=0.01水準で有意

わせもあれば、その論理性がやや不明確なものも認められる。しかし一般的な傾向としては、親子の間の絆が強いことが、健康的・活動的な行動や、それを支える意識となってプラスに働いていると考えられる点は共通していると言って良いであろう。総じて言えば、子どもが幼少である時ほど、親からの影響度が大きいので、親はそのことを心に銘じて、子と接する必要性があるということが言えるであろう。

#### 4. 結語

子どもの体力低下が懸念されている時代であるが、体力や健康に関する行動・意識についての親から子への影響力を把握することを目的として、親に対して一連の質問紙法による調査を実施した。分析の結果、子が小学校期にある場合、また幼少児期にある場合には、健康体力に関わる親の意識や行動が子に直接的に影響を及ぼす傾向が明らかになった。しかしこのような影響傾向は、中学校期に入るにつれて漸次弱まり、子はやがてより広い社会との関わりの中で自己を確立して行く傾向が示唆された。

体力低下傾向が含む意味は単に体力が低下することばかりでなく、親子の間の深い関わりによって、子が漸次自己管理能力を身に付けたり、自己実現の方法を学習して行くことと軌を一にしていると考えられる。従って健康体力に関わる意識や行動だけが問題なのではなく、それらが作られる親子関係の過程の中で、子の「生きる力」がより充実できるような、子が自己実現できるような方向での、自立促進の営みが必要と思われる。

#### 5. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省:平成16年度体力・運動能力調査報告書, 2005.

- 2) 宮崎県教育委員会：平成 16 年度児童生徒の体力・運動能力報告書，2005.
- 3) 西嶋尚彦：青少年の体力低下要因とその対策，日本体育学会第 52 回大会発表資料，2001.
- 4) 波多野義郎：小学生における生活習慣と健康・体力との関係，東京学芸大学紀要，45（5）：157-165，1994.
- 5) 波多野義郎：子どもの体力を考える，青少年問題，46（10）：4-9，1999.
- 6) Hatano, Yoshiro and Yuji Yanagimoto: Relationship between degree of activeness during the childhood and fitness and health measures in the later life, Physical Fitness Research: Proceedings of ICPFR Tokyo, pp.245-253, 1981.
- 7) Hatano, Yoshiro and Yuzo Uchida: Examination of health/wellness check list results and certain characteristics of the Japanese youth, 東京学芸大学紀要，38（5）：5-8，1986.
- 8) 小野三嗣，波多野義郎ほか：幼児・児童における調整力テスト成績と生育歴特性との関係，体育科学，8：143-149，1980.
- 9) Yanagimoto, Yuji, Y. Hatano: Factors prescribing the degree of sport participation at various growth stages, Better life through sports, 1986 Asian Games Scientific Congress Proceedings, pp.534-551, .